ISSN 0919-0120
2008.1　No.62

豊田市郷土資料館だより
No.62

Toyota City Museum Of Local History

目 次

・特別展紹介「風外本高－人と画と－」 2
・発掘調査速報 高橋遺跡 3
栃原遺跡 4
郷上遺跡ほか(試掘調査) 5
・市史編さん報告「市史刊行計画が決まりました！」 6
・郷土史調査レポート「忠順が見ていた後ろ姿」(寄稿) 7
・文化財シリーズ62・資料館NEWS 8

表紙写真　左：達磨の図　／　右：暴風猛虎図　／　背景：武陵桃源図

特別展「風外本高展　－人と画と－」

平成20年１月26日(土)～３月２日(日)

特別展「風外本高　人と画と」は足助の香嵐渓にある香積寺の25世住職風外本高和尚の画とその業績を紹介する展覧会です。今回の展示は、大きく分けて風外の画を紹介するコーナー「画僧風外」と禅僧としての業績を紹介するコーナー「禅僧風外」とから構成されています。風外和尚は地域で親しまれ、香積寺に住したのは８年ほどでしたが、多くの画が残されています。

本展示は、地域に残された画をまず地域の方々に見ていただきたいと考え、地域にある作品、香積寺時代に書かれた作品を優先的に紹介しています。

＊節分図（香積寺蔵）

鬼の面とお福さんの面を描き、上部に「不苦者有智」（ふくはうち）「遠仁者疎道」（おにはそと）と大きく書かれています。

節分にちなんで「福は内」「鬼は外」ですが、この当て字で「苦しまざる者、智有り」「遠ざかる仁者は道に疎し」と読ませて禅の教えをわかりやすく説いています。

平易な言葉で民衆教化を行ったとされる風外の禅僧としての一面を垣間見る作品です。

＊虎

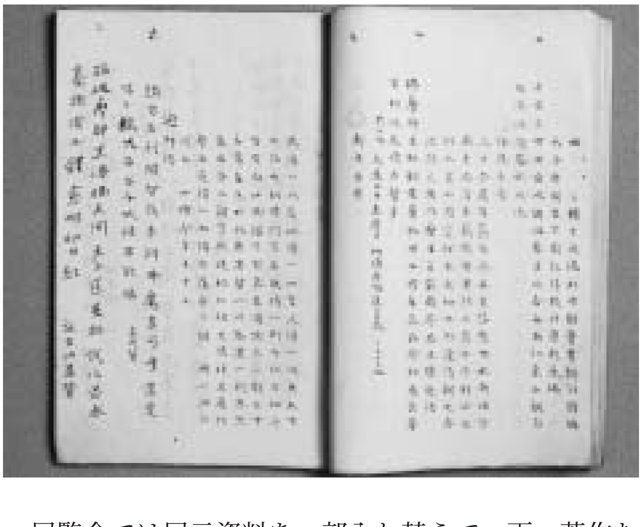
虎を得意としたと伝えられる風外ですが、その迫力ある姿は、やはり代表作といえます。展示では香積寺蔵の「暴風猛虎図」（表紙）（展示期間１月26日～２月12日）と「神虎図」（個人蔵）をご覧いただけます。いずれも横向きに座り振りかえる姿で描かれています。全身を描かず、体の一部をはみ出させる事で大きさを感じさせます。「暴風猛虎図」はいわゆる八方睨み、「神虎図」は口を大きく開け威嚇しているかのような図様です。

＊一筆龍（香積寺蔵）

一見すると画とも書とも見える作品です。筆の勢いで龍の躍動感を表現し、墨の濃淡で顔や手足を描き分けています。的確に形を捉える作者の力量を感じることのできる作品です。

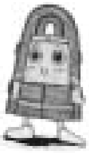
＊「烏鵲楼高閑録」

「烏鵲楼」とは風外が、隠棲した場所で、「高閑」は風外の別号です。つまり、烏鵲楼に棲む高閑（風外）の記録・語録です。天保４年～13年頃、香積寺の住職であった時期から烏鵲楼に隠棲して間もない頃までの記載があります。この頃に侍従した弟子が書き残したものでしょうか。香積寺蔵の写本と駒澤大学図書館蔵の写本と２種類展示します。

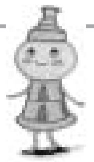


展覧会では展示資料を一部入れ替えて、画、著作などあわせて約70点を展示します。是非ご来館ください。

（伊藤　智子）


どうたくん

発掘調査速報


すえちゃん

○高橋遺跡〔高橋町７丁目〕

高橋遺跡は、上野町から高橋町の広範囲に展開する大規模な集落遺跡です。矢作川に注ぐ加茂川右岸の台地上に、幅70～100ｍ、長さ900ｍの範囲に帯状に分布しています。昭和41年からこれまでに約43,700㎡の発掘調査が行われ、弥生時代中期末から平安時代にかけての竪穴建物353棟、古墳時代以降の掘立柱建物57棟、方形周溝墓５基、土器棺墓２基、横穴式石室１基などが見つかりました。特に弥生時代後期から終末期（１～２世紀）には、竪穴建物90棟以上が確認され、この時期の矢作川流域を代表する集落として有名です。

今回の調査区は高橋遺跡の北東端にあたります。平成16年の範囲確認調査で方形周溝墓と思われる溝が複数見つかり、墓域となることが予想されていました。平成19年５月から平成20年１月にかけて、9,900㎡に及ぶ本調査を実施し、竪穴建物３棟、掘立柱建物３棟、方形周溝墓23基などが見つかりました。

竪穴建物はいずれも平面長方形で、弥生時代中期中葉から後葉(紀元前２～１世紀)に属するものです。そのうちＳＢ１は火災にあっており、土屋根の焼けた痕跡が広がっていました。特筆されるのは、北側の一角からまとまって石鏃10点が出土したことです。石鏃は弓矢の先に取り付ける石製の「やじり」で、縄文時代の遺跡からは数多く見つかりますが、弥生時代に入ると少なくなります。これまでの高橋遺跡の調査では、確実な弥生タイプの石鏃は８点しか見つかっていないことからも、今回の出土の特異さをうかがうことができます。まとめて置かれていたのはなぜでしょうか？

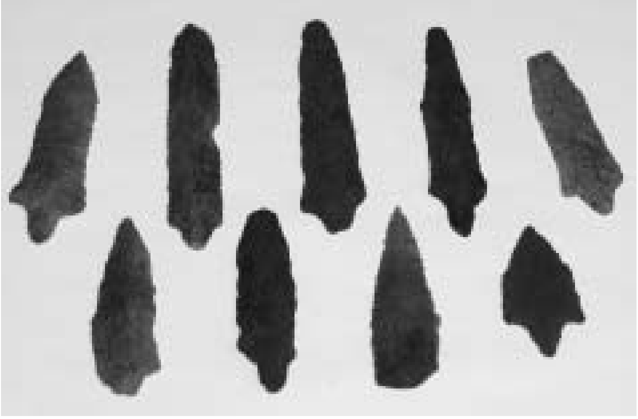
方形周溝墓は、ムラの有力者を葬った四角いお墓で、周りには溝が巡ります。今回新たに23基が見つかり、過去の調査分を加えれば28基となります。１遺跡から見つかった数としては、三河最多の事例となります。

高橋遺跡の方形周溝墓は、溝の内側が1辺５ｍ前後の規模が標準的な大きさです。１辺の大きさには、3.5～7.5ｍと幅があり、最も小さなお墓と最も大きなお墓では、面積に換算すれば４倍以上の差があることになります。方形周溝墓はこれら大小が混在して、帯状にかたまって分布しているかのように見えます。

周溝からは、集落で数多く出土する甕(煮炊き用)は少なく、代わりに壺が多く出土しました。土器から判断すれば、竪穴建物と同じ弥生時代中期の方形周溝墓が１基あります。そのほかの時期がわかるものはいずれも弥生時代後期初頭から終末期(古段階)に属しており、弥生時代後期になると本格的に墓域が形成されたことがわかります。

今回の調査結果を、これまでの高橋遺跡や周辺の調査成果と照らし合わせてみましょう。これまで調査された竪穴建物は、弥生時代中期末以降であるため、今回の調査区の竪穴建物はそれらに先行します。また、これまで高橋遺跡の墓域と考えられてきた場所（南西500ｍ）の方形周溝墓は、弥生時代終末期から古墳時代初頭に属するため、今回の調査区はそれに先行する墓域になります。弥生時代後期の竪穴建物が、今回の調査区に近い北東側に集中していることも、それを裏付けているかのようです。現在調査中の栃原遺跡の成果を加えれば、高橋地区の弥生時代が少しずつ解き明かされてくるようです。（森　泰通）

方形周溝墓が並ぶ様子


竪穴建物から出土した石鏃

○栃原遺跡〔東山町２丁目〕

栃原遺跡は標高約68ｍの河岸段丘縁辺に位置し、崖下の低地とは約20ｍの比高差があります。眼下には加茂川・市木川、その北方には弥生時代の大集落である高橋遺跡・堂外戸遺跡があり、それらを一望することができます。大変眺望のよい立地ですが、水利に恵まれておらず集落を営むのは困難と考えられる点、過去に土器片がわずかに拾われていた程度であった点から、遺跡の実態は謎のままでした。

この栃原遺跡が市営住宅の跡地開発に先駆けて発掘調査されることとなりました。4,500㎡の調査が計画され、昨年９月初旬に発掘開始を開始し、現在までに南側（Ａ地区）2,200㎡の調査が完了しています。

調査当初、表土を除去し赤土層まで掘削を行い古い時代の遺構を探しました。しかし、全く遺構を確認できませんでした。再度掘削を行ったところ、最初に確認した赤土層は住宅造成時の盛土であったようで、その下から真の赤土層とそこに掘り込んだ弥生時代・古墳時代の竪穴住居（18軒）、掘立柱建物（３棟）が姿を現しました。

竪穴住居は穴を掘って床とし、その上に柱と屋根材を架けて建築されています。弥生時代のものは上から見ると長方形で、床には柱穴や炉の痕跡が認められます。通常、竪穴住居の柱材は長い年月の間に腐敗し失われていることが一般的ですが、SB19では火災により炭化した住居の建築材が出土しました。火災の跡はこのほかにも複数の弥生時代住居で確認できています。

弥生時代の竪穴住居跡（SB19）

特筆されるのは、竪穴住居群の東側で弥生時代の溝が発見されたことです。この溝は集落を区画する溝（環濠）で、その中から大量に土器が出土しました。深いところで約1.0ｍで、部分的に浅くなり橋状となる部分もあります。また約15ｍの範囲にわたり溝が半円状に突出する部分が認められます。このような例は弥生時代の首長が住んだ居館跡にも認められています。これまで市内で行われた弥生時代遺跡の環濠では確認できておらず注目されます。

竪穴住居群（上）と周囲を巡る環濠（下）

12月末より北側（Ｂ地区）2,300㎡の調査が開始されました。これまでに弥生時代のお墓（方形周溝墓）などが見つかっており、環濠を挟んで南側（居住域）と北側（墓域）で土地の利用が異なっていたようです。今後の調査の進展が期待されます。（髙橋　健太郎）

環濠の突出部

◯郷上遺跡〔渡刈町寄田〕

物流倉庫建設に先立ち、開発区域に遺跡がどれくらい及んでいるのかを確認するために調査を実施しました。細長く溝状に掘って溝や住居跡などの遺構を探りました。この確認調査ではいくつか溝がみつかったほか、古代や中世の土器・陶器が出土しました。古代の遺物の中には墨で文字が書かれたものもありました。

確認調査の結果に基づいて２月からは本調査に入る予定です。

調査中のトレンチ

◯寺部城跡〔寺部町１丁目〕

宅地開発に伴う緊急調査を行いました。約30㎡と狭い調査区でしたが、南北に位置する幅２ｍ、深さ約1.2ｍの断面形状が逆台形の溝がみつかりました。この溝に堆積した土の上層には径20～40㎝の石が多数みられました。その石の下からは土師器の皿や戦国期の陶磁器などが出土しました。この調査地点は寺部城の東端に位置し、城郭の一部か城の周囲に館を構えた区画の一部を形成する溝ではないかと考えられます。

掘りあがった溝（土の堆積状況もみえます）

◯寺部城関連遺跡〔寺部町２丁目〕

住宅の建替えに伴う本調査を行い、約100㎡を掘りました。この調査では江戸時代の建物跡や戦国期の溝などがみつかり、多数の遺物が出土しました。この調査地点は先に紹介した寺部城跡の調査地点に近く、２つの地点でみつかった溝は、ほぼ同じ方向にあることや溝の規模がほとんど同じで堆積した土の状況や石が多数みられたことなど共通する要素がみられました。この溝の位置づけについては今後の出土遺物の整理や資料の検討などが課題となります。

手前の石が並んでいるところが溝
奥側にみえる穴は建物の柱跡

◯梶畑遺跡〔桑原町梶畑〕

住宅建設計画に先立って遺跡の有無を確認するために調査を行いました。梶畑遺跡は縄文時代の遺跡として知られていますが、河川の護岸工事や他の住宅建設などでほとんど失われた状態の遺跡です。今回の調査地点でも掘削したものの遺構・遺物はみつかりませんでした。

◯亀首遺跡〔亀首町本郷〕

道路建設などの開発に先立つ遺跡の範囲確認調査を実施しました。工事予定区域において遺跡の有無を確認する調査で、予定範囲の一部に遺跡があることがわかりました。この調査では弥生時代と中世の遺構がみつかり、土器や陶磁器などが出土しました。

このほか、９月～12月には神明遺跡（鴛鴨町神明）・金谷大塚古墳（金谷町）・弁財１号窯（西岡町）や（仮）第２藤岡中学校建設予定地（西中山町）などで遺跡の範囲確認調査や試掘調査を実施しました。

市史編さん報告2

市史刊行計画が決まりました！

○新修豊田市史編さん事業発足全体会議の開催

5月19日に崇化館交流館で、執筆委員、執筆協力員56名が集い、新修豊田市史編さん事業発足全体会議が開催されました。専門委員の紹介、新修豊田市史編さん計画の説明の後、新行紀一愛知教育大学名誉教授に「新修豊田市史に期待するもの」をテーマにご講演をいただき、本格的に部会活動がスタートしました。

○年次別刊行計画について

11月29日に第2回編さん委員会（会長・鈴木公平市長）が開催され、年次別の刊行計画が承認されました。

平成22年度の考古(原始)資料編1、概要版の刊行から32年度の総集編の刊行まで、全25巻を毎年度2～3巻ずつ刊行する計画です。

○専門委員会について

現在、103名の執筆委員、執筆協力員、調査協力員の方々に市史編さんに携わっていただいています。活動は原始、古代・中世など10の部会に分かれ、それぞれの部会長が専門委員会委員として、執筆、編さん等専門的事項について審議いただいています。専門委員会は、年4回開催されます。（鈴木 昭彦）

専門委員会委員（部会長）

部会名等	氏　名	所　　属
顧　問	新行　紀一	愛知教育大学名誉教授
原　始	加藤　安信	愛知県立松蔭高等学校校長
古代・中世	西宮　秀紀	愛知教育大学教授
近　世	大塚　英二	愛知県立大学教授
近　代	羽賀　祥二	名古屋大学教授
現　代	阿部　和俊	愛知教育大学教授
自　然	大和田道雄	愛知教育大学教授
民　俗	伊藤　良吉	名古屋民俗研究会会長
美術・工芸	山崎　隆之	愛知県立芸術大学名誉教授
建　築	杉野　　丞	愛知工業大学教授
概要版	田中　祥雄	東海学園大学副学長

＊委員長－阿部和俊、副委員長－羽賀祥二

年次別刊行計画

年度	原始	古代 中世	近世	近代	現代	自然	民俗	美術 工芸	建築	概要版	総集編	刊行数
22	資									概		2
23			資	資				別				3
24	資				資		別					3
25			資	資					別			3
26	資	資					別					3
27			資	資		別						3
28					資		別					2
29	本	本	本									3
30				本	本							2
31												
32											別	1
計	4	2	4	4	3	1	3	1	1	1	1	25

＊「本」－本編、「資」－資料編、「別」－別巻、「概」－概要版

○問合せ先（市史編さん担当）　電話(0565)36－0570／ FAX (0565)31－0162／ E-mail：toyosisi@hm9.aitai.ne.jp

郷土史
調査レポート
（寄稿）

忠順が見ていた後ろ姿

豊田市文化財保護審議会委員　近藤 銈司

はじめに

幕末の国学者・村上忠順（ただまさ）は、生涯で６万首に及ぶ和歌を詠んだといわれていますが、多感な少年時代に、親のどんな後ろ姿を見ながら育ったのか、新しい資料を基に紹介します。

１　医師「玄意」の後ろ姿

忠順の父・忠幹（ただもと）は、代々「玄意」を名乗るお医者さんでした。忠幹の投薬した記録帳「**配制記**」によれば、生まれ故郷の高岡地区はもちろん、福谷（三好町）・下重原（刈谷市）などからも患者が訪れる名医でした。多い日には37名もの患者に薬を処方するほどの多忙な日々を送っていました。そして、忠幹は文政13年（1830）９月、刈谷藩の「御医師見習」になり、亡くなるまでの23年間御殿医として勤めました。

忠順は、医者としててきぱき患者に接する父の後ろ姿を見ながら育ちました。

２　俳諧師「三光」・「美志」の後ろ姿

20歳代の忠幹は、当時流行していた俳諧興行に親しみ、号を「三光」といい、『**雲の峰**』等に作品を入賞させていました。忠順が誕生した文化９年（1812）には、作品を審査する「評者」になり、地域の人たちを指導する立場にありました。また、母親の於美志（およし）も、号を「美志」といい、夫とともに俳諧づくりを楽しんでいました。

言葉遊びに興じる両親の後ろ姿を、少年時代の忠順はじっと見つめていたのです。

３　狂歌師「橋久」・「咲枝」の後ろ姿

40歳代の忠幹は、俳諧から狂歌の世界に躍り出て、より広い世界で活躍していたことがわかりました。忠幹は「**石山人橋久**」、母・於美志は「**櫻児庵咲枝**」という号で、大江戸を舞台に『**狂歌坂東太郎**』や『**新草狂歌集**』などに作品を発表していたのです。

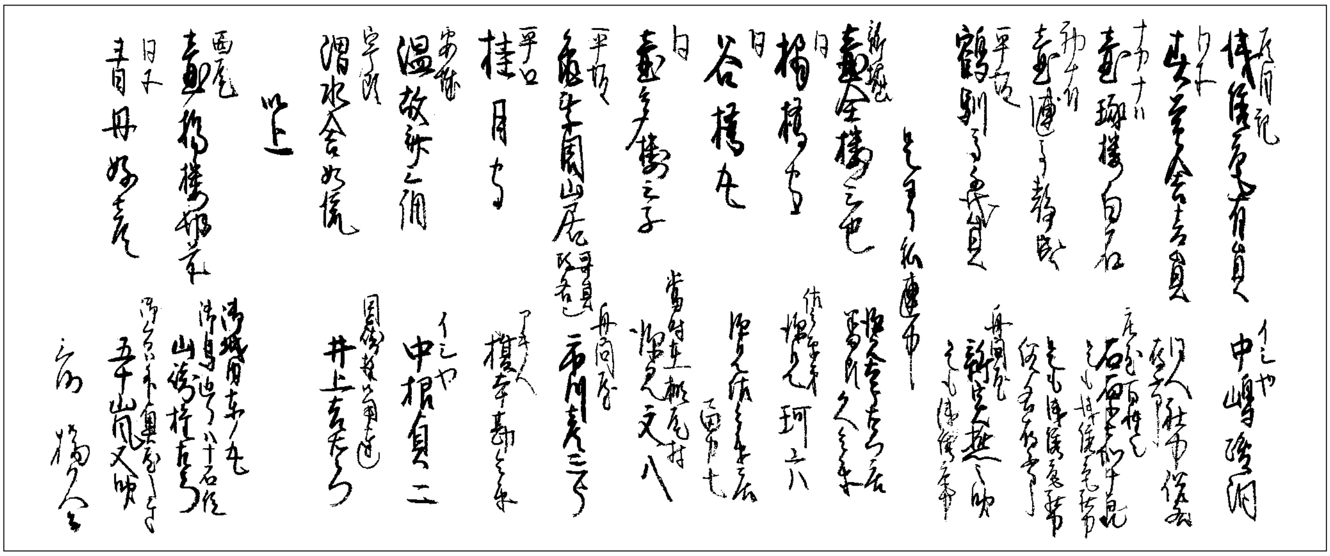
当時、忠幹の妻・於美志の実家である深見一族は、三河木綿の中継ぎ問屋として江戸を舞台に取引をし、たいへん繁盛していました。なかでも深見美房（号「三笑」）は、浅門総連を率いて狂歌界に君臨する蜀山人の判者の一人として、尾張三河の指導的立場にありました。三笑が文政８年（1825）に引退した後、その仲間達（連）を忠幹が引き継ぎ、深見一族の指導者として活躍していたことが「**橋久のメモ**」から判明しました。

この時期は忠順が14･5歳のころのことで、忠順は渡邊綱光に師事して和歌も習っていました。

終わりに

後になって、両親が活躍した『狂歌坂東太郎』などの本の行間に、「コノ四季恋雑ノ題ハ堀川院百首ノ題ニヨリテ定メタルモノ」などの註をいれ吟味しているところを見ると、忠順自身も、相当狂歌に関心を寄せていたことがわかりました。

医者としてまた刈谷藩の藩医として医療に尽す一方、俳諧や狂歌を通して交友を広める粋な両親の空気に浸りながら、忠順は和歌への素養を蓄えていたのです。



刈谷市図書館蔵『狂歌花鳥四帖』の表紙裏から発見された「橋久のメモ」

文化財シリーズ

62

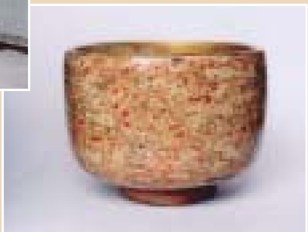
足助乾漆技法
矢の製作技法
市指定無形文化財

無形文化財は、人の「技」そのもので歴史や芸術の上で価値の高いものを言います。豊田市では足助で行われてきた漆工芸と弓矢の製作技法の２件を指定し、伝統的な技の継承を図っています。

足助乾漆は、木型に数枚の麻布を生漆を用いて貼り合わせて形成し、漆が乾いたところで麻布を取り外します。凹凸のできた型に再度いろいろな色漆を塗り、仕上げに研ぐことで斑模様の独特な風合いを出す技法です。もともとは小原和紙の指導者で知られる美術工芸家の藤井達吉氏の指導助言を受けて戦後足助で始められましたが、現在では高山兼男（兼山）氏のみがこの技を伝えています。制作されるものは抹茶茶碗や棗、盆などがあり、奥行きのある華やかな色彩が特徴です。

矢の製作技法は全国的にほぼ同じで、この地区独自のものではありません。しかし、現在矢師は全国に20名足らずしかおらず、貴重な技術となっています。矢の棒にあたる部分を箆といい必ず４つの節をもたせ、後部には矢を射ったときに回転が加わるように矢羽を取付けます。鈴木武夫（茂弘）氏は二代目の矢師で、初代の茂氏の跡を継ぎ足助で活動しています。

矢の製作技法
鈴木武夫氏



足助乾漆技法
高山兼男氏作

資料館NEWS

史跡めぐり　小原・稲武

10月24日（水）・27日（土）に市内の史跡・天然記念物を訪ねる文化財探訪ツアーを開催しました。
24日（水）は小原の「薬師寺」、「市場城址」、道慈山観音寺「仁王像」、杉田久女句碑などを訪ねました。

道慈山観音寺

八幡神社の「スギ・ヒノキ合体木」

27日（土）は稲武の「武節城址」、瑞龍寺「シダレザクラ」、八幡神社の「スギ・ヒノキ合体木」、「大野瀬の子持ちカツラ」を訪ねました。
初めて史跡を見学した方も多く、大変喜んでいただけました。

企画展『縄文の工芸美』

11月17日（土）から１月14日（祝）の会期で企画展「縄文の工芸美」を開催しました。
2,085名の入館者がありました。多くの方のご来館ありがとうございました。

冬休みこども週間

12月22日（土）～１月６日（日）に、「冬休みこども週間」を開催しました。「こままわし」「羽子板」「すごろく」などむかしながらのお正月の遊びを楽しむ姿が見られました。
★「大人向け花もちづくり」「親子花もちづくり」「親子門松づくり」の講座を行いました。

大人向け　花もちづくり

お正月遊びを楽しむ子どもたち

親子門松づくり
水引であわじ結びに挑戦！

どの講座もみなさんとても楽しんでいらっしゃいました。期間中は534名の来館者があり、大盛況に終わりました。

利用案内

開館時間	9:00～17:00
休館日	毎週月曜日（祝祭日は開館）、年末年始
入場料	無料（特別展開催中は有料）
交通	名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩10分
	名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩15分
	愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ　徒歩15分
駐車場	約20台

■豊田市郷土資料館だより No.62■

平成20年１月31日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎（0565）32-6561　FAX（0565）34-0095
E-mail ： rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL ： http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはＨＰでもご覧になれます。